

三賞（藤原賞・大川賞・佐伯賞）の由来

藤原賞

藤原 銀次郎（ふじわら ぎんじろう/ふじはら ぎんじろう）（1869-1960）

日本の実業家、政治家。戦前の三井財閥の中心人物の一人。

富岡製糸場支配人から王子製紙（初代）の社長を務め「製紙王」といわれた。

- 1869年(明治 2年) 6月17日信濃国水内郡平柴村(1876年から安茂里村、現在の長野市平柴)に生まれた。
- 1895年(明治 28年) 慶應義塾卒業後、三井銀行入社。
- 1897年(明治 30年) 三井が経営する富岡製糸場支配人就任。
- 1898年(明治 31年) 米内内閣で商工大臣のとき王子製紙でストライキが起こると、臨時支配人に就任しストライキを取めた。
- 1899年(明治 32年) 三井物産に移り同社の上海支店長、木材部長などを務めた。
- 1911年(明治 44年) 王子製紙専務に就任。人材発掘に努めた。欧米の機械製造会社と特別契約を結び、機械購入の見返りとして王子製紙からの海外研修生の見学・視察を認めさせた。また苫小牧の新工場建設を進めた。この時には三井銀行から資金を一切調達せず、紙問屋に対して王子製紙の実情を訴え、手形の決済を早くすることで資金を得、苫小牧工場の増設及び60%の増資を実現した。また藤原は社員教育にも力を入れ、工場の火災予防を推進した。
- 1929年(昭和 4年) 貴族院勅選議員に勅任される。
- 1933年(昭和 8年) 王子製紙・富士製紙・樺太工業の3社合併を実現。資本金1億5000万円、日本国内の市場占有率(シェア)8割以上を持つ巨大製紙企業を出現せしめ、新生王子製紙の社長に就任し「製紙王」の異名を取るようになった。
- 1938年(昭和 13年) 高嶋菊次郎に社長職を譲り会長となる。同年私財800万円(現在価値で約280億円)を投じ、人材育成を目指して横浜に藤原工業大学(1944年に慶應義塾大学工学部となる)を設立。
- 1959年(昭和 34年) 数え90歳を記念として藤原科学財団を設立し、同財団に1億円を寄付し藤原賞を設けた。
- 1960年(昭和 35年) 3月17日死去。享年90歳。 叙正三位、叙勲一等旭日大綬章。

戦前の財界には日本全国に篤志家がいたが、藤原はそのうちでも最も代表的な人物として今日でも大学の社会関連の講義や経営者団体などのセミナーなどで紹介されている。藤原工業大学や共立女子大学、地方の大学や官立高等工業学校にも多額の寄付を行っている。また森林科学の知見をスウェーデンから学び、森林保護・植林活動の重要性も説いている。その一方で、生活は極めて質素だったといわれている。

大川賞

大川 平三郎 (おおかわ へいざぶろう) (1860-1936)

明治から昭和初期の実業家。「日本の製紙王」と呼ばれ、「大川財閥」を築いた。

- 1860 年(万延元年) 10 月 25 日 12 月 30 日川越藩三芳野村(現・埼玉県坂戸市横沼)生まれた。母は富岡製糸場を作った尾高惇忠の妹・みち子。妻の照子は、渋沢栄一と後妻、兼子との間に生まれたので、平三郎は渋沢栄一の娘婿に当たる。大川家の家計は苦しく、平三郎は、13 歳で東京に出て渋沢栄一の書生として渋沢家の掃除など雑用をこなしながら、本郷の壬申義塾や大学南校(現在の東京大学)でドイツ語や英語、歴史を学んだ。収入を得て実家に仕送りをするのが急務であった平三郎は、栄一が中心となり創立した抄紙会社(後の王子製紙(初代))に 16 歳で入社し月給は全て仕送りにした。抄紙会社では図工の職であったが、「紙を抄く技術が最も大切な仕事であるはずだ」と志願して職工になり、努力を重ね外国人技師の技術を全て習得し日本人で最初の製紙技師となった。
- 1879 年(明治 12 年) 大川は会社不振の原因を分析した建白書を提出し、会社に認められ 20 歳の時、社命により渡米。シャワングム社・モンテギュー社などで製紙技術を修得した。1 年半の留学を終え帰国した大川は、パルプの原料を藁に替えるコストダウンを実行、21 歳にして会社の副支配人に就いた。
- 1884 年(明治 17 年) 化学パルプの技術革新が起こった欧州に調査に赴いた。
- 1890 年(明治 23 年) 帰国後、試行錯誤の末に日本で最初の亜硫酸法による木材パルプの製造に成功。更に木材チップを煮る釜を改良して「大川式ダイゼスター」を考案。
- 1893 年(明治 26 年) 技術部門を担当する専務取締役就任。
- 1898 年(明治 31 年) 王子製紙を退社。
- 1914 年(大正 3 年) 樺太工業を設立。
- 1919 年(大正 8 年) 富士製紙の社長に就任。この結果、大川が経営する製紙会社は合計で国内市場の 45%を握り、大川は「日本の製紙王」と呼ばれた。
- 1933 年(昭和 8 年) 王子製紙・富士製紙・樺太工業の 3 社が合併(「大王子製紙」発足)し、同社の相談役に就任した。
- 1928 年(昭和 3 年) 貴族院議員となった。
- 1936 年(昭和 11 年) 12 月 30 日死去。享年 78 歳。

大川は郷里の三芳野村(現・坂戸市)の困窮を救うため、財政支援を続け、教育や消防の施設購入に私財を注ぎ込んだ。小畔川や越辺川は度々氾濫を繰り返したため、1924 年(大正 13 年)、全額私費で地元の協力を得て 1.1km の堤防を建設した。今日、それは「大川堤」と呼ばれている。また自身が貧しい幼年時代を過ごしたので、農村の衰退した現状を憂い、1924 年(大正 13 年)に私財により「大川育英会」を立ち上げ、埼玉県出身の学生に奨学金を提供、就学の機会を与えている。

